

「近藤亜樹さんのJikkaにおけるプロジェクトに行きました」 松井みどり

16日、末広町のオルタナティブスペースJikkaにおける近藤亜樹さんの公開制作を見にうかがいました。

今回のプロジェクトは、展覧会というよりは、近藤さんのペインティングのプロセスを見せる、即興的な演劇的パフォーマンスのようなものです。道路に面した側が完全に開いたギャラリーの部屋のなかで、動物のようなコスプレをした近藤さんが、部屋のあちこちに積まれた様々な大きさの段ボールの側面に次々と絵を描いていき、それらを道路から覗く観客に対するバリケードのように積み直しながら、自分を動物園の生き物になぞらえます。

何よりも、タブローの完成度をかなり高く仕上げる能力を持つ近藤さんが、今回、ゴールを定めず、即興的に描き、そのプロセスを人に見せるというアイデアが、面白いと思いました。段ボールという3次元の物は、キャンバスとは全然違う条件をもつ媒体です。そこでは、作家は、自分が決めた最終ビジョンに合わせて一繋がり平面を分割するのではなく、物の厚みと格闘し、視界の遮りによって作られる新たな境界の中で今できることを即座に判断しながら仕事を進めていかななくてはなりません。ひとつの箱の一断面に描かれた絵は、他の箱との接触の仕方によって様々な関係性をつくり、新たな図案やイメージを触発していきます。同時に、自分の立ち位置から見えない部分にある絵が他の箱に描かれた絵とどのような繋がりを持つのかは、箱を見る位置や箱の置き換えなどによって異なる効果をもたらすものなので、作家はその結果全てをコントロールしようとするよりも、それを観客の体験に向けて開いていかななくてはなりません。そういう視覚的可動領域を展示空間に残しておく事で、観客を迎え入れ、その反応を触発しやすい環境がつけられていくのです。

近藤さんの展示では、スペース狭しと置かれ積み上げられた箱の側面に描かれた植物や動物や人の身体の部分のイメージのランダムな連動や集積が、都市やジャングルのような雑多な物が入り乱れる場所を連想させ、その間から近藤さん扮する生物が隠れたり、出て来たりできる隠れ家や砦のような環境をつくっていました。全てが断片的にしか見えない状況がかえって観客の想像力を刺激し、近藤さんとの間に思考上の鬼ごっこを誘っていました。

近藤さんやキュレーターの深野一朗さんと今回の展示について、いろいろお話をしました。近藤さんは、絵画というものが個体としても一定の完成度を持ち、観客の方に向かって壁に架けられるという展示のされ方から一度離れてみたかったと語っておられました。つまり、白い壁のギャラリーというアートの神聖領域のような場所の、作家と観客双方に特権的な視点から作品を見ることを強制する心理効果を封印して、自分が以前から興味を持っていた「劇場的」環境の中に身を置いて、「舞台装置」のような物をつくってみたいということです。それは、絵画の自立性が観客に既に完成された作品の美をなぞり味合うという「恭しい振る舞い」を促すのに対して、近藤さんは、そういう儀式的関係の虚構性を暴きだす形で、

観客に自ら体験できる「現実」を確認するよう促そうとしていることを意味しています。つまり、その形式は違っていても、近藤さんが目指しているのは、観客が物との関係性を通して空間や自分の身体を新たな視点や感覚から認識するという、ミニマリズム彫刻が実践していたような「劇場的」（この「劇場的」という言葉自体はマイケル・フリードによって批判的に使われたものにせよ）環境の制作であると言えるでしょう。

さらに、近藤さんが考えている「劇場」とは、舞台と客席が完全に分離した一般演劇の劇場ではなく、寺山修司が望んだような、ストリートで展開する寸劇やハプニングを呼び込む即興的行為ややりとりの器としての劇場のアイデアに近いものでしょう。そして、Jikkaのスペースは、そういう目的に対してほぼ理想的に作用しているように思えました。秋葉原からの流れであるパソコンショップやフィギュア店、ファストフードストアやラーメン屋や昔ながらのそば屋や旅館などが雑多に並ぶ通りや路地が、南北に交差しながら連綿と続くこの町は、ちょうど屋台や夜店の連なりのような不思議な活気を持っています。そこにギャラリーがあっても、異質なもの同士の繋がりの中のひとつとしてすんなり溶け込む事ができるようなオープンな雰囲気があります。しかも、町の賑わいと呼応しながら大通からちよっとはいった路地の、その奥にある公園に隣接するというJikkaの立地は、外から人が気軽に覗き込んだり時にははいつてきたりすることのできるような気安さをもっていて、建物の中でありながら外の空気を感じさせ、部屋の中と町中を繋いでいるような狭間的空間なのです。その条件もまた、近藤さんが考えておられる即興劇場の成立には格好の場所と言えるでしょう。実際に、毎日来てくださる若い女性が、毎回何か小さな物をもってきてくれて、近藤さんから別の物をもらって帰るといふ、物々交換ハプニングも起こっているようです。

そういう小さな出来事を記録していくことで、公開制作のプロセスが一種の関係性の芸術的なパフォーマンスになっていくと思いました。

2013年5月18日